

秋

芥川龍之介



信子は女子大学にゐた時から、才媛さいえんの名声を担になつてゐた。彼女が早晩作家として文壇に打つて出る事は、殆ほとんど誰も疑はなかつた。中には彼女が在学中、既に三百何枚かの自叙伝体小説を書き上げたなどと吹聴ふいちやうして歩くものもあつた。が、学校を卒業して見ると、まだ女学校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家ごけを立て通して来た母の手前も、さうは我儘わがままを云はれない、複雑な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、縁談からきめてかかるべく余儀なくされた。

彼女には俊吉しゅんきちと云ふ従兄いとこがあつた。彼は当時まだ大学の文科に籍を置いてゐたが、やはり将来は作家仲間しやけんに身を投ずる意志

があるらしかった。信子はこの従兄の大学生と、昔から親しく往来してゐた。それが互に文学と云ふ共通の話題が出来てからは、愈親いよいよしみが増したやうであつた。唯、彼は信子と違つて、当世流行のトルストイズムなどには一向敬意を表さなかつた。さうして始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた。かう云ふ俊吉の冷笑的な態度は、時々万事真面目な信子を怒らせてしまふ事があつた。が、彼女は怒りながらも俊吉の皮肉や警句の中に、何か軽蔑けいべつ出来ないものを感じない訳には行かなかつた。

だから彼女は在学中も、彼と一しよに展覽会や音楽会へ行く事が稀ではなかつた。尤も大抵もつとそんな時には、妹の照子も同伴いっしょであつた。彼等三人は行きも返りも、気兼ねなく笑つたり話したりした。が、妹の照子だけは、時々話の圏外へ置きざりにさ

れる事もあつた。それでも照子は子供らしく、飾窓の中のパ
ソルや絹のシヨオルを覗き歩いて、格別閑却された事を不平に
思つてもゐないらしかつた。信子はしかしそれに気がつくとも
かならず必話を転換して、すぐに又元の通り妹にも口をきかせようと
した。その癖まづ照子を忘れるものは、何時いつも信子自身であつ
た。俊吉はすべてに無頓着なのか、不相変あひかはらず気の利いた冗談じょうだんはか
り投げつけながら、目まぐるしい往来の人通りの中を、大股に
ゆつくり歩いて行つた。……

信子と従兄との間からは、勿論誰の眼に見ても、来るべき彼
等の結婚を予想させるのに十分であつた。同窓たちは彼女の未
来をてんでに羨んだり妬ねたんだりした。殊に俊吉を知らないもの
は、(滑稽と云ふより外はないが、)一層これが甚はなはだしかつた。信
子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確

な事をそれとなく故意に仄ほのめかせたりした。従つて同窓たちの頭の中には、彼等が学校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿が、恰あたかも新婦新郎の写真の如く、一しよにはつきり焼きつけられてゐた。

所が学校を卒業すると、信子は彼等の予期に反して、大阪の或商事会社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行つたもの話によると、信子は何時いつもと変りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

同窓たちは皆不思議がつた。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違つた意味で妬ましい感情とが交

つてゐた。或者は彼女を信頼して、すべてを母親の意志に帰した。又或ものは彼女を疑つて、心をはりがしたとも云ひふらした。が、それらの解釈が結局想像に過ぎない事は、彼等自身さへ知らない訳ではなかつた。彼女はなぜ俊吉と結婚しなかつたか？ 彼等はその後暫くの間、よるときはると重大らしく、必かならずこの疑問を話題にした。さうして彼是かれこれ二月ばかり経つと——全く信子を忘れてしまつた。勿論彼女が書く筈だつた長篇小説の噂なぞも。

信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界限かいはいでも最も閑静な松林にあつた。松脂まつやにの匂と日の光と、——それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活いき活いきした沈黙を領してゐた。信子はさう云ふ寂しい午後、時々理由もなく気が沈むと、きつと針箱の引出

しを開けては、その底に畳んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た、書簡箋の上にはこんな事が、細々とペンで書いてあつた。

「——もう今日かぎり御姉様と御一しよにゐる事が出来ないと思ふと、これを書いてゐる間でさへ、止め度なく涙が溢れて来ます。御姉様。どうか、どうか私を御赦おゆるして下さい。照子は勿体ない御姉様の犠牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

「御姉様は私の為に、今度の御縁談を御きめになりました。さうではないと仰有おつしやつても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晩、御姉様は私に俊さんは好きかと御尋おききになりました。それから又好きならば、御姉様がきつと骨を折るから、俊さんの所へ行けとも仰有おつしやいました。あの

時もう御姉様は、私が俊さんに差上げる筈の手紙を読んでいら
しつたのでせう。あの手紙がなくなつた時、ほんたうに私は御
姉様を御恨めしく思ひました。(御免遊ばせ。この事だけでも私
はどの位申し訳がないかわかりません。)ですからその晩も私に
は、御姉様の親切な御言葉も、皮肉のやうな気さへ致しました。
私が怒つて御返事らしい御返事も碌ろくに致さなかつた事は、もち
ろん御忘れになりもなさりますまい。けれどもあれから二三日
経つて、御姉様の御縁談が急にきまつてしまつた時、私はそれ
こそ死んででも、御詫わびをしようかと思ひました。御姉様も俊
さんが御好きなのでございますもの。(御隠しになつてはいや。
私はよく存じて居りましたよ。)私の事さへ御かまひにならなけ
れば、きつと御自分が俊さんの所へいらしつたのに違ひござい
ません。それでも御姉様は私に、俊さんなどは思つてゐないと、

何度も繰返して仰有いました。さうしてとうとう心にもない御結婚をなすつて御しまひになりました。私の大事な御姉様。私
が今日鶏を抱いて来て、大阪へいらつしやる御姉様に、御挨拶
をなさいと申した事をまだ覚えていらしつて？ 私は飼つてゐ
る鶏にも、私と一しよに御姉様へ御詫び二を申して貰ひたかつた
の。さうしたら、何にも御存知ない御母様まで御泣きになりま
したのね。

「御姉様。もう明日は大阪へいらしつて御しまひなさるでせう。
けれどもどうか何時までも、御姉様の照子を見捨てずに頂戴、
照子は毎朝鶏に餌をやりながら、御姉様の事を思ひ出して、誰
にも知れず泣いてゐます。……」

信子はこの少女らしい手紙を読む毎に、かならず必涙が滲にじんで来た。
殊に中央停車場から汽車に乗らうとする間際、そつとこの手紙

を彼女に渡した照子の姿を思ひ出すと、何とも云はれずにいぢ
らしかつた。が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犠牲
的なものであらうか。さう疑を挟む事は、涙の後の彼女の心へ、
重苦しい気持ちを拵げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避
ける為に、大抵はぢつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうち
に外の松林へ一面に当つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の
色に變つて行くのを眺めながら。

二

結婚後^{かれこれ}彼は三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等
も亦幸福な日を送つた。

夫は何処^{どこ}か女性的な、口数を利^きかない人物であつた。それが

毎日会社から帰つて来ると、必晩飯後の何時間かは、信子と一しよに過す事にしてゐた。信子は編物の針を動かしながら、近頃世間に騒がれてゐる小説や戯曲の話などもした。その話の中には時によると、基督教キリストけうの匂のする女子大学趣味の人生観が織りこまれてゐる事もあつた。夫は晩酌の頬を赤らめた儘、読みかけた夕刊を膝へのせて、珍しさうに耳を傾けてゐた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加へた事がなかつた。

彼等は又殆ほとんど日曜毎に、大阪やその近郊の遊覽地へ気散じな

一日を暮しに行つた。信子は汽車電車へ乗る度に、何処でも飲食する事を憚はばからない関西人が皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。實際身綺麗な夫の姿は、そう云ふ人中に交つてゐると、帽子からも、背広からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹼の匂に似た、一

種清新な雰^{ふん}囲^み気を放散させてゐるやうであつた。殊に夏の休暇中、舞^ま子^{ひこ}まで足を延した時には、同じ茶屋に來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下^げ卑^びた同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。

その内に信子は長い間、捨ててあつた創作を思ひ出した。そこで夫の留守の内だけ、一二時間づつ机に向ふ事にした。夫はその話を聞くと、「愈^い女^よ流作家になるかね。」と云つて、やさしい口もとに薄笑ひを見せた。しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頬杖をついて、炎天の松林の蝉の声に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

所が残暑が初秋へ振り変らうとする時分、夫は或日会社の出

がけに、汗じみた襟を取変へようとした。が、生憎襟あいにくは一本残らず洗濯屋の手に渡つてゐた。夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顔を曇らせた。さうしてズボン吊を掛けながら、「小説ばかり書いてみちや困る。」と何時になく厭味を云つた。信子は黙つて眼を伏せて、上衣の埃を払つてゐた。

それから二三日過ぎた或夜、夫は夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の経費をもう少し軽減出来ないものかと云ひ出した。「お前だつて何時までも女学生ぢやあるまいし。」——そんな事も口へ出した。信子は氣のない返事をしながら、夫の襟飾の紹刺ろざしをしてゐた。すると夫は意外な位執拗に、「その襟飾にしてもさ、買ふ方が反かへつて安くつくぢやないか。」と、やはりねちねちした調子で云つた。彼女は猶更なほさら口が利けなくなつた。夫もしまひには白けた顔をして、つまらなさうに商売向きの雑誌か何か

ばかり読んでゐた。が、寢室の電燈を消してから、信子は夫に背を向けた儘、「もう小説なんぞ書きません。」と、囁くやうな声で云つた。夫はそれでも黙つてゐた。暫くして彼女は、同じ言葉を前よりもかすかに繰返した。それから間もなく泣く声が洩れた。夫は二言三言彼女を叱つた。その後でも彼女の啜泣すずりなきは、まだ絶え絶えに聞えてゐた。が、信子は何時の間にか、しつかりと夫にすがつてゐた。……

翌日彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返つてゐた。

と思ふと今度は十二時過ぎても、まだ夫が会社から帰つて来ない晩があつた。しかも漸くやうや帰つて来ると、雨外套も一人では脱げない程、酒臭い匂を呼吸してゐた。信子は眉をひそめながら、甲斐かひ甲斐ひしく夫に着換へさせた。夫はそれにも関らず、まはらない舌で皮肉さへ云つた。「今夜は僕が帰らなかつたから、

余つ程小説が抄取^{はかど}つたらう。」——さう云ふ言葉が、何度となく女のやうな口から出た。彼女はその晩床にはいると、思はず涙がほろほろ落ちた。こんな処を照子が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるであらう。照子。照子。私が便りに思ふのは、たつたお前一人ぎりだ。——信子は度々心の中でかう妹に呼びかけながら、夫の酒臭い寢息に苦しまされて、殆^{ほとんど}夜中まんじりともせずに、寝返りばかり打つてゐた。

が、それも亦翌日になると、自然と仲直りが出来上つてゐた。そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて来た。信子は何時か机に向つて、ペンを執る事が稀になつた。その時にはもう夫の方も、前程彼女の文学談を珍^{さまつ}しがらないやうになつてゐた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末^{さまつ}な家庭の經濟の話に時間を殺す事を覚え出した。その上又かう云ふ話題

は、少くとも晩酌後の夫にとつて、最も興味があるらしかつた。それでも信子は氣の毒さうに、時々夫の顔色を窺^{うかが}つて見る事があつた。が、彼は何も知らず、近頃延した髭を噛みながら、何時もより余程快活に、「これで子供でも出来て見ると——」なぞと、考へ考へ話してゐた。

するとその頃から月々の雑誌に、従兄^{いとこ}の名前が見えるやうになつた。信子は結婚後忘れたやうに、俊吉との文通を絶つてゐた。唯、彼の動静は、——大学の文科を卒業したとか、同人雑誌を始めたとか云ふ事は、妹から手紙で知るだけであつた。又それ以上彼の事を知りたいと云ふ氣も起さなかつた。が、彼の小説が雑誌に載つてゐるのを見ると、懐しさは昔と同じであつた。彼女はその頁をはぐりながら、何度も独り微笑を洩らした。俊吉はやはり小説の中でも、冷笑と諧謔^{かいぎやく}との二つの武器を宮本

武蔵のやうに使つてゐた。彼女にはしかし気のせるか、その軽快な皮肉の後に、何か今までの従兄にはない、寂しさうな捨鉢すてばちの調子が潜んでゐるやうに思はれた。と同時にさう思ふ事が、後めたいやうな気もしないではなかつた。

信子はそれ以来夫に対して、一層優しく振舞ふやうになつた。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ晴れと微笑してゐる彼女の顔を見出した。その顔は以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常であつた。彼女は針仕事の店を拡げながら、彼等が東京で式を挙げた当時の記憶なども話したりした。夫にはその記憶の細かいのが、意外でもあり、嬉しさうでもあつた。「お前はよくそんな事まで覚えてゐるね。」——夫にかう調戯からかはれると、信子は必無言の儘、眼にだけ媚こびのある返事を見せた。が、何故それ程忘れずにゐるか、彼女自身も心の内では、不思議に思ふ

事が度々あつた。

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納ゆひなふが済んだと云ふ事を報じて来た。その手紙の中には又、俊吉が照子を迎へる為に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。「何分当方は無人故、式には不本意ながら参りかね候へども……」そんな文句を書いてゐる内に、（彼女には何故かわからなかつたが、）筆の洩る事も再三あつた。すると彼女は眼を挙げて、必外かならずの松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々そうそうと蒼黒く茂つてゐた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時も薄笑ひを浮べながら、彼女が妹の口真似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。「どれ、寝るかな。」——二

三時間の後、夫は柔な髭やはらかを撫でながら、大儀さうに長火鉢の前を離れた。信子はまだ妹へ祝つてやる品を決し兼ねて、火箸で灰文字を書いてゐたが、この時急に顔を挙げて、「でも妙なものね、私にも弟が一人出来るのだと思ふと。」と云つた。「当り前ぢやないか、妹もゐるんだから。」——彼女は夫にかう云はれても、考深い眼つきをした儘、何とも返事をしなかつた。

照子と俊吉とは、師走しはすの中旬に式を挙げた。当日は午少ひるし前から、ちらちら白い物が落ち始めた。信子は独り午の食事をすませた後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかつた。「東京も雪が降つてゐるかしら。」——こんな事を考へながら、信子はぢつとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれてゐた。雪が愈いよいよ烈しくなつた。が、口中の生臭さは、やはり執念しよねく消えなかつた。……

信子はその翌年の秋、社命を帯びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い期限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、来匆々きそうそう顔を出した時の外は、殆一日も彼女をつれて、外出する機会を見出さなかつた。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終点から、たつた一人俤くるまに揺られて行つた。

彼等の家は、町並が葱畑ねぎばたけに移る近くにあつた。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要かなめもちの垣、それから竿に干した洗濯物、——すべてがどの家も変りはなかつた。この平凡な住居すまひの容子ようす

は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、声に応じて出て来たのは、意外にも従兄の方であつた。俊吉は以前と同じやうに、この珍客の顔を見ると、「やあ。」と快活な声を挙げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなつたのを見た。「暫らく。」「さあ、御上り。生憎あいにく僕一人だが。」「照子は？ 留守？」「使に行つた。女中も。」——信子は妙に恥しきを感じながら、派手な裏のついたコオート上衣をそつと玄関の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書斎兼客間の八畳へ坐らせた。座敷の中には何処を見ても、本ばかり乱雑に積んであつた。殊に午後の日の日当つた障子際の、小さな紫檀したんの机のまはりには、新聞雑誌や原稿用紙が、手のつけやうもない程散らかつてゐた。その中に若い細君の存在を語つてゐるものは、唯床の間の壁に立てかけた、

新しい一面の琴だけであつた。信子はかう云ふ周囲から、暫らく物珍しい眼を離さなかつた。

「来ることは手紙で知つてゐたけれど、今日来ようとは思はなかつた。」——俊吉は巻煙草へ火をつけると、さすがに懐しさうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何いかが？ 幸福？」——信子も亦二言三言話す内に、やはり昔のやうな懐しさが、よみ返つて来るのを意識した。文通さへ碌にしなかつた、彼是かれこれ二年越しの気まづい記憶は、思つたより彼女を煩わづらはさなかつた。

彼等は一つ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合つた。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話題はいくら話しても、尽きない位沢山あつた。が、二人とも云ひ合せたやうに、全然暮し向きの問題には触れな

つた。それが信子には一層従兄と、話してゐると云ふ感じを強くさせた。

時々はしかし沈黙が、二人の間に来る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其処そこには待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に従兄の顔を窺うかがはずにはゐられなくなつた。が、彼は平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を装つてゐる気色けしきも見えなかつた。

その内に照子が帰つて来た。彼女は姉の顔を見ると、手を取り合はないばかりに嬉しがつた。信子も唇は笑ひながら、眼には何時かもう涙があつた。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以来の生活を互に尋ねたり尋ねられたりしてゐた。殊に照子は活

き活きと、血の色を頬に透かせながら、今でも飼つてゐる鶏の事まで、話して聞かせる事を忘れなかつた。俊吉は巻煙草を啣へた儘、満足さうに二人を眺めて、不相変あひかはらずにやにや笑つてゐた。

其処へ女中も帰つて来た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書はがきを受取ると、早速側の机へ向つて、せつせとペンを動かした。照子は女中も留守だつた事が、意外らしい気色を見せた。「ぢや御姉様がいらした時は、誰も家にゐなかつたの。」
「ええ、俊さんだけ。」——信子はかう答へる事が、平氣を強しひるやうな心もちがした。すると俊吉が向うを向いたなり、「旦那様に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」と云つた。照子は姉と眼を見合せて、悪戯いたづらさうにくすりと笑つた。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかつた。

間もなく信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を囲むこと

になつた。照子の説明する所によると、膳に上つた玉子は皆、家の鶏が産んだものであつた。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪りやくだつで持つてゐるんだね。小はこの玉子から——なぞと社会主義じみた理窟を並べたりした。その癖此処にゐる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは俊吉自身に違ひなかつた。照子はそれが可笑をかしいと云つて、子供のやうな笑ひ声を立てた。信子はかう云ふ食卓の空氣にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにゐられなかつた。

話は食後の果物を荒した後も尽きなかつた。微酔を帯びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭弁きべんを弄した。その談論風発が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も小説を書き出さうかしら。」と云つた。すると従兄は返事をする代りに、グウルモンの警句を抛はぶ

りつけた。それは「ミュウズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ。」と云ふ言葉であつた。信子と照子とは同盟して、グウルモンの権威を認めなかつた。「ぢや女でないりや、音楽家になれなくつて？ アポロは男ぢやありませんか。」——照子は真面目にこんな事まで云つた。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になつた。

寝る前に俊吉は、縁側の雨戸を一枚開けて、寝間着の儘狭い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく「ちよいと出て御覧。好い月だから。」と声をかけた。信子は独り彼の後から、沓脱ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脱いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は庭の隅にある、痩せがれた檜ひのきの梢こずえにあつた。従兄はその檜の下に立つて、うす明い夜空を眺めてゐた。「大へん草が生え

てゐるのね。」——信子は荒れた庭を気味悪さうに、怯おづ怯おづ彼
のゐる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜
かな。」と呟つぶやいたただけであつた。

暫く沈黙が続いた後、俊吉は静に眼を返して、「鶏小屋とりごやへ行つ
て見ようか。」と云つた。信子は黙つて頷うなづいた。鶏小屋は丁度檜
とは反対の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、ゆつくり
其処おほまで歩いて行つた。しかし蓆むしろ囲がしひの内には、唯鶏の匂のす
る、朧おぼろげな光と影ばかりがあつた。俊吉はその小屋を覗いて見
て、殆ほとんど独り言かと思ふやうに、「寝てゐる。」と彼女さかやに囁ささやいた。
「玉子を人に取りられた鶏が。」——信子は草の中に佇たんだ儘たず、さ
う考へずにはゐられなかつた。……

二人が庭から返つて来ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり
電燈を眺めてゐた。青い横よこばひがたつた一つ、笠かさに這はつてゐる

電燈を。

四

翌朝俊吉は一張羅の背広を着て、食後そうそう匆々玄関へ行つた。何
でも亡友の一周忌の墓参をするのだとか云ふ事であつた。「好
いかい。待つてゐるんだぜ。午頃ひるごろまでにやきつと帰つて来るか
ら。」——彼は外套をひっかけながら、かう信子に念を押した。
が、彼女は華奢きやしやな手に彼の中折なかをれを持つた儘、黙つて微笑したば
かりであつた。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめま
めしく茶をすすめなどした。隣の奥さんの話、訪問記者の話、
それから俊吉と見に行つた或外国の歌劇団の話、——その外愉

快なるべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかった。が、信子の心は沈んでゐた。彼女はふと気がつくくと、何時も好い加減な返事ばかりしてゐる彼女自身が其処にあつた。それがとうとうしまひには、照子の眼にさへ止るやうになつた。妹は心配さうに彼女の顔を覗きこんで、「どうして？」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのだから、はつきりした事はわからなかつた。

柱時計が十時を打つた時、信子はものう懶さうな眼を挙げて、「俊さんは中々帰りさうもないわね。」と云つた。照子も姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ——」とだけしか答へなかつた。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りてゐる新妻の心があるやうな気がした。さう思ふと愈よ彼女の気もちは、憂鬱に傾かずにはゐられなかつた。

「照さんは幸福ね。」——信子は頤あごを半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其処へ忍びこんだ、真面目な羨望せんぼうの調子だけは、どうする事も出来なかつた。照子はしかし無邪気らしく、やはり活き活きと微笑しながら、「覚えていらつしやい。」と睨にらむ真似をした。それからすぐに又「御姉様だつて幸福の癖に。」と、甘えるやうにつけ加へた。その言葉がびしりと信子を打つた。

彼女は心もち暈まぶたを上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顔をして、姉と眼を見合せた。その顔にも亦蔽またひ難い後悔の心が動いてゐた。信子は強ひて微笑した。——「さう思はれるだけでも幸福ね。」二人の間には沈黙が来た。彼等は柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鉄瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませてゐた。

「でも御兄様は御優しくはなくつて？」——やがて照子は小さな声で、恐る恐るかう尋ねた。その声の中には明かに、気の毒さうな響が籠つてゐた、が、この場合信子の心は、何よりも憐憫れんびんを反撥はんぱつした。彼女は新聞を膝の上へのせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答へなかつた。新聞には大阪と同じやうに、米価問題が掲げてあつた。

その内に静な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはひが聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顔に当てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくつたつて好いのよ。」——照子は姉にさう慰められても、容易に泣き止まうとはしなかつた。信子は残酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震へる肩へ無言の視線を注いでゐた。それから女中の耳を憚はばかるやうに、照子の方へ顔をやりながら、「悪るかつたら、私があやまるわ。私は照さ

んさへ幸福なら、何より難ありがた有いと思つてゐるの。ほんたうよ。俊さんが照さんを愛してゐてくれれば——」と、低い声で云ひ続けた。云ひ続ける内に、彼女の声も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり始めた。すると突然照子は袖を落して、涙に濡れてゐる顔を挙げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかつた。が、唯、抑へ切れない嫉妬の情が、燃えるやうに瞳を火照ほてらせてゐた。「ぢや御姉様は——御姉様は何故昨夜も——」照子は皆まで云はない内に、又顔を袖に埋めて、発作的に烈しく泣き始めた。……

二三時間の後、信子は電車の終点に急ぐべく、幌俵ほろぐるまの上に揺られてゐた。彼女の眼にはひる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであつた。其処には場末らしい家々と色づいた雑木の梢とが、徐おもむろにしかも絶え間なく、後へ

後へと流れて行つた。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂はせた、冷やかな秋の空だけであつた。

彼女の心は静かであつた。が、その静かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかつた。照子の発作が終つた後、和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返してゐた。しかし事實は事實として、今でも信子の心を離れなかつた。彼女は従兄の帰りも待たずこの俤上に身を託した時、既に妹とは永久に他人になつたやうな心もちが、意地悪く彼女の胸の中に氷を張らせてゐたのであつた。――

信子はふと眼を挙げた。その時セルロイドの窓の中には、ごみごみした町を歩いて来る、杖を抱へた従兄の姿が見えた。彼女の心は動揺した。俤を止めようか。それともこの儘行き違はうか。彼女は動悸を抑へながら、暫くは唯幌の下に、空しい透

巡を重ねてゐた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなつて来た。彼は薄日の光を浴びて、水溜りの多い往来にゆつくりと靴を運んでゐた。

「俊さん。」——さう云ふ声が一瞬間、信子の唇から洩れようとした。実際俊吉はその時もう、彼女の俥のすぐ側に、見慣れた姿を現してゐた。が、彼女は又ためらつた。その暇に何も知らない彼は、とうとうこの幌俥とすれ違つた。薄濁つた空、疎まばらかな屋並、高い木々の黄ばんだ梢、——後には不相変人あひかはらず通りの少い場末の町があるばかりであつた。

「秋——」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにゐられなかつた。

(大正九年三月)

後註

- 一 「御詫び」は底本では「御詫び」
- 二 「御詫び」は底本では「御詫び」

秋

底本：「現代日本文学大系 43 芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和 43）年 8 月 25 日初版第 1 刷発行

入力：j.utiyama

校正：野口英司

1998 年 5 月 20 日公開

2004 年 2 月 8 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。